

小・中学校における音読・朗読指導の在り方を探る

——話すことに繋げる合文脈音読——

神部 秀一

帝京短期大学 生活科学科

【抄録】

本稿は、筆者自身の朗読塾生体験及び朗読指導の体験に基づいて、今後の小・中学校における音読・朗読指導の在り方を探ることを目的とする。筆者は、音読から朗読へ、朗読から話すことへ、という関連の中に音読を位置づけようとしている。従って、本稿で扱う音読は、聞き手に分かりやすく伝えるということに配慮した音読で、朗読の前段階に位置するものである。

学校教育の中では、児童・生徒が全員教科書という文字資料を持っている。そのため、どのように読んでも内容は伝わる。聞き手に内容を分かりやすく伝える読み方をする、という発想が起こりにくいのである。どのように読めば、聞き手が、内容を理解しやすく、聞きやすい音読になるのだろうか。さらに、話すことに繋げる音読指導は何に配慮してどう指導すべきか。筆者は、中学生に「朗読入門」の授業を実践し、大学生には音読・朗読の意識調査を行った。そして、今後の教育実践への示唆として、以下を得ることができた。①音読・朗読を好きにさせること、②下読み及び意味句の決定の習慣化、③音読指導事項（音読技術、音読用語）の明確化、④指導方法として、「追い読み」を主に「個人読み」も組み込むこと、⑤人前で発表にあまり抵抗のない小学生の内に音読・朗読に馴染ませること、⑥合文脈音読の指導を行うこと、である。

分かりやすく内容を伝えるために、また、話すことに繋げるために⑥合文脈音読の指導を行うのである。合文脈は文章内容の理解を前提とするため、音読指導は、内容の理解の時または理解の後に行うことが指導の時機として適切である。合文脈音読で獲得した音読技術は、声を操る技能を高め、話し方の向上に資する。

【キーワード】合文脈音読、朗読、話すこと、追い読み、ぐんま朗読塾

I. 問題

1. はじめに

本稿は、筆者自身の朗読塾生体験及び朗読指導体験に基づいて、今後の小・中学校における音読・朗読指導の在り方を探ることを目的とする。

筆者は、2003年より約20年間「ぐんま朗読塾」（遠藤敦司氏主宰。以下、朗読塾）に学んでいる。朗読塾では、年1回の朗読発表会を目指して毎月1回の練習を重ねている。

朗読塾では、まず主宰が「文意・文脈」に基づいた意味句や緩急・明暗・間等の見本を示し、塾生に一人ずつ読ませている。見本通りにできなかった読み方に対して、「声が低い。もっと高

く」「しっかり間を取って」と指導が入る。

このようにして、塾生の読み方が鍛えられる。文意・文脈による意味句の作り方も、高低・明暗・緩急といった周辺言語の付け方も、間の長さも、体験的に理解させていくのである。なお、朗読塾の詳細については別に記した（注1）。

音読・朗読は、実技系の国語である。従って指導は、朗読塾のように先生の見本を真似ることから始めるのが基本だと考える。実技系国語の書写も、先生のまたは書写教科書の見本を見て学ぶ。見本を真似させるという指導が、実技の上達には不可欠なのではないだろうか。そう思える経験を積んでいる。

さらに、こうした練習を20年続けてくると、音読・朗読が自然に自分の話し方に影響を与え

ていることに気づく。自分でも間の取り方が随分上手になったと感じている。実感としてそう思うのである。

筆者は、こうした体験的事実をそのまま筆者だけの経験で終わらせるのは惜しい気がした。朗読塾で学んだ知見をもっと学校教育の中で生かせるのではないかと考え、本稿を執筆することとした。

2. 問題

(1) 見落とされている音読指導の2つの観点

筆者が朗読塾で学んで、学校教育に見落とされていると感じた事柄が2つある。

- ①文字資料を持たない聞き手の想定
 - ②意味句（言葉のまとまり）への意識不足
- これらの点について、以下に詳述する。

まず、①の「文字資料を持たない聞き手の想定」は、学校教育の盲点となっていると感じている。朗読塾での年1回の発表会では、お客様（聞き手）は文字資料を持っていない。そのため、聞き手に対して、内容が分かりやすく、言葉が聞きやすく、さらに気持ちよく聞いてもらう、ということを第一に考える。しかし、学校では、聞き手は全員が教科書という文字資料を持っている。そのため、どのように読んでも意味が伝わる。文字資料を持っていない相手に分かりやすく伝える読み方、という発想が起こりにくいのである。日常的に教室で行われる音読指導では、多くが「言葉をハッキリ。声を大きく」等の明瞭・大小の指導に終止しているのではなかろうか。この指導では、声は変わるが読み方は変わらない。下手な読み方はそのまま、言葉が明瞭になっただけ、声が大きくなっただけである。読み方の技術を指導していないのである。

音読の指導であるなら、児童・生徒の読み方の何がどう悪いか、どこをどう直せばもっと分かりやすい読み方になるか、という指導をすべきであろう。筆者自身振り返って、音読指導での反省点でもある。

次に、②の「意味句」についても、学校教育の中ではかなり無関心であると考えている。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説では「語のまとまり」として「ひとまとまりの語や文として読むこと」が「重要」（p49）と指摘されている¹⁾が、どのくらいの教師が、下読みで意味句を作り読み方を決定しておこうと心掛けて

いるだろうか。小学校1年では分かち書きの文章のため、教師は必然的にいくつかの意味句を作ることになる。「追い読み（追いかけて読み、後追い読みともいう）」で指導する場合、児童は教師の読み方をコピーしている。だからいつも同じ意味句によって安定した見本を示すことが重要である。しかし、事前に意味句を作っておく習慣がないと、その都度自身の生理的な都合で異なった意味句を作ってしまうことになる。朗読塾で学ばなければ、今もその都度、勝手に意味句を作っていると思う。なお、事前に意味句を決定しておく必要については、別に述べている（注2）。

①も②も、聞き手に分かりやすく聞いてもらうための配慮である。筆者は、聞き手に配慮した音読指導を考えている。文字資料を持たない相手に、どのように意味句を作り、どのように読めば、内容が理解しやすく、聞きやすい音読になるか。つまり、野口（2012）のいう「文脈や文意に即応した読み方（合文脈音読）」（注3）を目指している。分かりやすく相手に届ける音読である。本稿で扱う音読指導は、この「合文脈音読」の指導とあってよい。

なお、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編には、音読・朗読に関して以下の記述がある。「音読が、文章の内容や表現をよく理解し伝えることに重点がある（後略）」（p123）¹⁾。学習指導要領も、合文脈音読を求めているということも指摘しておきたい。

音読は、「正確・明晰・流暢（正しく・はっきり・すらすら）を目標とする」（注4）とされるが、上記の分かりやすく聞き手に届けようとする音読は、むしろ朗読の前段階というべきかもしれない。このレベルの音読は、音読から朗読へという方向性を内包しているといつてよい。朗読はまた話すことへの方向性を内包する。筆者は、音読・朗読ともにそれぞれ一歩高い表現を目指して位置づけようとしているのである。

(2) 音読から話し方の向上へ

筆者は、音読・朗読と話すことに関して、繋がりがあると考えている。前述の通り、音読を朗読の前段階として位置づける。そして、朗読は話すことの前段階として位置づける。というのも、朗読では、声の表情としての周辺言語（高低、緩急、明暗、間、等々）を自在に操れるように練習する。筆者自身の体験として、この練

習が、話すことによい影響を与えていると感じるからである。

このような、音読・朗読指導を話すことの向上に繋げるという考えは、かなり古くから存在する。龍野(2013)によると、昭和33年の小学校学習指導要領に認められるという²⁾。

——倉澤栄吉(1951)、平井昌夫(1955)らが、音読(特に朗読)を「読むこと」ではなく「聞くこと・話すこと」に位置づけることを主張している。音読と朗読を話すことの練習としてとらえる考え方がこの期の特徴である。

因みに、平成29年版学習指導要領では、音読・朗読は、小学校では「知識及び技能」に位置づけられているが、中学校では指導事項としての明示がない。音読・朗読の関連内容は、「知識及び技能」の「話し言葉」の「音声」の中に認められる。現行の学習指導要領からも、音読・朗読から話すことへの繋がりが見て取れるのである。

朗読を「話しことば」へ生かす試みとして、NHKの元アナウンサーの集まり「ことばの杜」と東京学芸大学国語科教室及び附属小金井小・中学校国語部での産学連携事業「話しことば教材開発プロジェクト」の共同研究もある。その中で片山(2010)は、以下の仮説を立てている³⁾。

——「朗読」で伝えたい思い(読み)を明確にして、それをどう表現すればいいか吟味することで、日常の「話しことば」への意識も高まるのではないか？」(p25)

筆者も、同様に考えている。「正しく・はっきり・すらすら」を超えてよい。聞き手に内容を「分かりやすく、心地よく」伝えるという方向性を持たせた方がよいと考えている。音読から朗読へ、朗読から話すことへという方向性を意識すること、音声言語表現への方向性をもって音読・朗読を位置づけること。そう位置づけた方が、今よりもっと音読への意識や期待が高まるのではないだろうかと考えている。

(3)「追い読み」指導への賛否

朗読塾での練習方法に最も近い音読指導の方法として、「追い読み」がある。先生の読み方に従い、先生のように読ませる方法である。高橋(2008)は、この読み方に関して次のように評価している⁴⁾。

——教師の先導に従って音読する後追い読みが

ある。これは漢字の読み、語句を意味ごとにまとめた読み、アクセントやイントネーションを捉えた読みなど、効果大きい。一文ずつまとめることを原則にしたい。ただし、この読みは、教師の読み癖が移るという点に要注意である。(p26)

一方、荒木(1989)は、教師の見本提示や真似をさせる指導について、以下のように批判している⁵⁾。

——教師の範読や、上手な子どもの音読や、俳優や声優の録音テープを聞かせ、それを口移しになぞらせ、おうむのようにまねさせるだけの授業では、子ども達の音声表現能力が伸びるはずがありません。口移しよみ、なぞりよみ、口真似よみは、悪しき技術主義です。安易に完成ばかりを求める即効の指導、読み手の実感をのせない、むりに鋳型に押しこめる指導は戒めなければなりません。(p49)

荒木は、技術の大切さを認めているが、「間やイントネーションは、教師から教えられて型から入っても、読み手の内在律、感動がなければ生き生きしてきません。子どもの創造的な音声表現力が伸びません」(p49)、「技術のうまさだけで文章をすべて読むような子どもを育ててはいけないのです」(p50)として、時間をかけて「内容理解」と「音声表現」の往還による「音声解釈による継続的な指導」を求めている。

筆者は、何ごととも一辺倒では問題があらうと考える。技術指導にこだわって、必ず教師の指示に従う、教師の真似をしなければならないということになれば、児童・生徒の音読・朗読への興味は薄れていってしまうだろう。しかし、最初は教師が見本を与え、音読技術を教えることは必要だと考える。考える素材をきちんと与えて、その後、児童・生徒に合文脈の音読を考えさせるという指導が最も自然であろう。音楽でも体育でも実技系の教科は、見本を大切にしているはずである。見本を示すことは指導の第一歩であろう。

II. 方法

本章では、筆者が中学3年生に行った「朗読入門」の授業、及び大学生に行った「音読・朗読に対する意識調査」について報告する。筆者

の考えている音読指導は、生徒にどのように受け止められるのだろうか。大学生には、音読技術の何がどの程度意識されているのだろうか、改めて確認することとした。

1. 実践報告（A 中学校 3 年生への朗読指導）

2021 年 2 月 3 日、群馬県太田市立 A 中学校で朗読指導の機会を得た。3 年生への詩の授業である。A 中学校に勤務する鯨井文代先生のお誘いで実現した。事前に、鯨井先生が 1 時間、詩の内容について指導し、本時は筆者が「朗読入門」として担当した。本授業の構想に当たっては次の 3 点を意図した。①合文脈音読への理解を深めること、②朗読練習が「話すこと」の上達に資すること、③具体的な朗読の指導内容を提案すること、である。

(1) 授業の概要

【実施日時・実施校・対象】

2021 年 2 月 3 日、3・4・5 校時、群馬県太田市立 A 中学校、3 年 A・B・C 組（28 名・29 名・27 名）

【授業者】

神部秀一（筆者）

【本時のねらい】

詩「わたしを束ねないで（新川和江）」の朗読をとおして、朗読の仕方を理解する。

【準備】

- ・カード①（朗読用語として）：「姿勢」「口形」（赤色カード）、「明瞭」「大小」（青色カード）、「高低」「緩急」「間」（黄色カード）、「休止」「呼吸」（深紅カード）
- ・カード②（「意味句」の説明用として）：「いろいろな」「とりの」「くちばしの」「かたちを」「みて」「みましょう。」

【授業の展開】

(ア) 本時の説明、朗読練習の意義

「朗読入門の授業です。今よりも 1 ランク上の朗読を目指します」

朗読上注目すべき言葉（朗読用語、音読用語でもある）を黒板に貼って説明。①姿勢・口形（赤カード）、②明瞭、大小（青）、③高低・緩急・間（黄）及び「休止」「呼吸」（深紅）。①と②は、声を変える。読み方を変えるのは、③の「高低・緩急・間」などの周辺言語と「意味句」であることを説明する。

この説明の時に、「ゆっくり話す」「間を取っ

て話す」ことを実演し、朗読の練習によって周辺言語を自在に操れるようになるので、公的場面での話し方が上手になるという例を示した。

「朗読は、実技系の国語です。書写と同様に、上手になるためには見本が必要です。今日は、私の読み方を真似してみましょう」

(イ) 意味句・声の高低の説明

小学校 1 年説明文の冒頭の一文を例に「意味句」の説明をする。

「言葉のまとまりのことを『意味句』といいます。文章の意味を考えて自分で作ります。作った意味句を一息で読む練習をします」

意味句を作る手順とその必要性を説明した。合文脈の意味句を作ること、意味句の頭の言葉が強調されることを示す。意味句を単位とし、追い読みを行う。

いろいろなとりの、はい。

（生徒）いろいろなとりの、

くちばしのかたちをみましょう。はい。

（生徒）くちばしのかたちをみましょう。

次に、声の高低を取り上げる。高い声から出発すると、聞き手が聞きやすい読み方となる。読み方を変えるのは、意味句、高低、緩急、明暗であり、声をコントロールする技術が必要であることを説明する。読むよりは語る、語るよりもしゃべる、という気持ちで朗読するよう話す。

(ウ)「わたしを束ねないで」の追い読み

合文脈音読と様々な読み方について説明。「感情を込めていいですよ」として、2 通りの読み方を示す。

「（絶対）わたしを束ねないで」

（勢いよく大げさに）、

「（お願い）わたしを束ねないで」

（ソフトに温かく）

どのようにも音声化できることを例示したが、学校で行う朗読は、大げさに読むのではなく文章の意味を理解して、内容を分かりやすく相手に伝えるような朗読がよいと説明した。

「今日は私が見本を示します」と告げ、原則として詩の一行を一意味句と決めて、追い読みを始める。

わたしを束ねないで。ここまでを一意味句とし

ます。途中で切りません。高い声から出発します。一緒にいきましょう。

わたしを束ねないで、はい。

(生徒) わたしを束ねないで、
次は、低くいきましょう。あらせいとうの花のように、

(生徒) あらせいとうの花のように、
しろい葱のように、はい。

(生徒) しろい葱のように、
高くいきましょう、束ねないでください、はい。

(生徒) 束ねないでください。

1マス空いている部分はしっかり間を取らせる。自分自身に言い聞かせている所は、低く読むよう指示する。

高くいきましょう、束ねないでください、はい。

(生徒) 束ねないでください。

間を取って、低く。わたしは稲穂、はい。

(生徒) わたしは稲穂、
もう一度、わたしは稲穂、はい。

(生徒) わたしは稲穂、
次は高く。秋、はい。

(生徒) 秋、
そうそう、そうです。次は、1マス空いていません。しっかり間を取る。

大地が胸を焦がす、はい、

(生徒) 大地が胸を焦がす、
ここも高く。見渡すかぎりの金色の稲穂、ここも意味句。一息で。はい。(以下略)

一連が終わった段階で、再度追い読み。その後、朗読の手順を確認する。まず黙読で読めない字、読みづらい箇所を確認する。自分で意味句を作る、高低を決める。間を取る。読み方を決めたらそれで練習する。この手順で練習していくよう説明する。

「自分で読み方を作ることが大事です。(以下略)」

(エ) 個人で練習する

個人の読む技能を高める必要がある。1列ごと、一番前が一連を二番目が二連を、というように一人ずつ読む場所を指示した。いきなり一人ひとりに読ませるのは心的抵抗があると考え、練習の時間を与えた。

(オ) 一連ずつ朗読発表

1列(5人)ごとに一編の詩を朗読する。1列ごとに短評を入れた。「意味句を一息で読んでいる。すごくいいね」「普段のしゃべる速さが、伝わりやすい速さです。公的場面では、普段よりゆっくり」「間をもっと思い切り取っていいですよ」等。

6列目が読み終わったとき、終了時刻となった。最後に、まとめとして以下を確認した。①高い声から出発。②大事な所はゆっくり。③「間」は、聞き手が内容を理解する時間です。休止の時間をきちんと取ること。「今日は、ありがとうございました」

(2) 生徒の感想

授業後2週間ほど経って、鯨井先生から生徒79人分の感想を頂戴した。「2週間ほど経過しましたので、口々に言っていた興奮気味な感想をお伝えできず残念です。ですが、授業を通して学んだことは、よく整理して、わずかな時間の中でよく書いていると思いました」という言葉が添えてあった。時間をおいて授業を振り返っているという点もできるだろう。表1が生徒の感想である。感想は、「音読・朗読の区別」「朗読のコツ(朗読技術)の理解」「合文脈についての理解」「緊張」の4つに分類して掲げた。

(3) 授業の成果(教師の感想)

授業者としての感想を以下に5点記す。

①「朗読用語」の説明、「追い読み」による教師主導の授業であるが、音読と朗読の区別、朗読のコツ(朗読技術)に関する好意的な感想や、文章の内容理解に基づく合文脈音読への理解に関する感想も多数確認できた。本授業の展開(教える→活動させる)で朗読指導は実施できると確信した。また、このような朗読の取り立て指導も大事であることを実感した。

②「追い読み」では、生徒の声も大きく、勢いを感じた。真似るという行為ではあるが、「意味句を一息で」とか「声の高低」とか、自分の声のコントロールに集中して、やらされているという感じではなく、目標を持って取り組んでいたように思われた。「追い読み」を通して、「意味句」「高低」「緩急」等の音読・朗読技術を知識として与えられるという手応えを感じた。

③個人の朗読力の向上を図る必要がある。追い読みで、読み方は伝えられるが、間の取り方などは、実際にやってみなければ体得できない。

しかし、「緊張した」という意見がかなりあった。中学3年生への朗読指導は、人前での「発表」に対する緊張を低減する方法を考える必要がある。というよりもむしろ、もっと前に、できれば小学生の内に、こうした体験は積ませておいた方がよいと思われた。

④教師が生徒の朗読に対して、何が良くて何が出来ていないか、聞き分けて指摘できる知識が

必要だと感じた。評価言または指導言をもつ必要がある。指導即評価ということを考えてとき、やはり、指導事項を決定しておく必要を感じた。⑤「朗読の仕方は朗読のみならず、様々な場面で活用できる」という感想もあったが、1回の授業では、話すことへ繋がっている、という実感は持たせられなかったように感じた。

表1 「朗読入門」授業の感想(79人)

<p>【音読・朗読の区別】 音読と朗読の違いが、はっきりとわかりました(18人)／朗読そのものの授業を受けたことがなく、朗読を音読と同じような意味だと思っていました。しかし、授業を受けて、朗読と音読の違いや、朗読の上手に聴こえる読み方などを知ることができました。</p> <p>【朗読のコツ(朗読技術)の理解、朗読への興味】 先生が声の高さや間を変えるだけで全然違って聞こえてくるので驚きました(3人)／声の大きさや間、日本語が自然に聞こえる読み方を学ぶことで、今までの朗読の仕方をどのように改善したら良いのか考えるきっかけになりました(2人)／何となく読点で区切るのではなく、強調したいところを考えて切るなどのコツを教わり、いくらか朗読が上手になった気がしました／朗読の授業などあまりやることがないので、最初を高く読む、間、強弱など細かく教えてもらい私も今後、相手に伝わりやすく読めるよう、授業を生かしたいです／文の流れを意識したり、声のトーンを工夫したり、それらによって全く違う読み方で、聞きやすい朗読が出来るようになりました／少しの間で、受ける感覚が変わるということを知って、面白かったです／文に明るさをつけたり、強弱をつけたりするのは初めてだった／声の高さや強弱など、実際にしてみると、伝えたいことや注目すべきところがより伝わってくるように感じました／読書をするときいつもは無言で読んでいたので、ためしに声を出して読書をしてみたらとても楽しかったです／声の大きさを変えてみたり、表情を豊かにすると、今まで朗読してきた自分が全くの別人が読んでいる気がしてきて、とても不思議に思いました／自分で、その通りに読むことができたので、とても嬉しかったです／読み方を変えるだけで聞いている人への伝わり方が変わるので、朗読はおもしろいと思いました／同じ本や物語でも語り手がどのようなイメージを持って読むかで、同じストーリーでも全く違うイメージで聞き手が受け取るのだと分かりました／強弱やスピードなどを変えて読むことで詩全体のイメージが変わりました。これらは、今までにない体験でした／先生の読み方は、一息や声の高低を意識して読んでいることを知り、実際に先生のように読むことで、詩を書いた作者の心情などが前よりもよくわかるようになりました。</p> <p>【合文脈についての理解、その他】 朗読とは、一文一文の意味を考えて、間や強弱、スピードを自分なりに考えて読むことだと知ることができました／一番印象に残っているのは、意味句の存在です。お手本の意味句を作ること、呼吸を入れたり、読み方への工夫を入れる事ができ、朗読をよりよいものへと進化させるという体験ができました(2人)／朗読をするためには、その詩について深く理解することが必要だということが分かりました／言葉の意味によって、明るさや強弱を変えることで、とても聴きやすい朗読になりました／意味句や間の大切さがよくわかり、内容を捉えることができました／朗読というのは、筆者(作者)の気持ちを代弁する大切なことなのではないかと考えることができました／朗読が特に好きで、自画自賛ではありますが得意だと思っていました。しかし、詩に対する筆者(作者)の心情や読み方の工夫により表現することの大切さを学び、自分の未熟さを痛感しました／朗読の仕方は朗読のみならず、様々な場面で活用できるかと思います。私の話す声は聞き取りづらいと言われることがあるので、この授業後に活かしていきたいと思います。</p> <p>【緊張】 皆の前で読んだ時は緊張しました。(9人)／声の高さや間の長さを意識して読んだことがなかったので一人で読む時はとても緊張しました／自分の番が回ってくると、とても緊張して頭の中で考えていたことはできませんでした／一人ずつ読むのは、ドキドキしたけれど、やってよかったと思いました／クラスメイトの前で朗読するのは緊張したけど、良い朗読をすることができました／緊張したけれど、学んだことを意識して朗読することができました／一人一人が朗読する時に、普段からの慣れもなく、唐突にやるのが決まり、全く準備ができず大変でした／一人ずつ読む時はとても緊張しましたが、いざ読んだ時は朗読の中に入って、あんまり緊張せず読み切ることができました。</p>
--

2. 調査

大学生は音読の際、「読み手」として、自分の声、速さ、間、アクセント等々、何をどの程度意識して読んでいるのだろうか。また、「聞き手」として何をどの程度意識して聞いているのだろうか、改めて実態を確認したいと考えた。この調査結果を今後の指導の在り方を検討するための具体的な資料とする。

(1) 大学生の音読・朗読に対する意識調査

調査は2022年10月10日、B大学にて実施した。対象は、筆者が担当する「日本語表現法」(3限・4限の2コマ)を受講している大学1・2年生、計61名である。

1) 調査内容

「音読・朗読アンケートのお願い(任意)」とし、「音読・朗読する時」と「聞き手として」の2つの立場に分けて質問した。

「音読・朗読する時」としての質問は以下のとおりである。

—「音読・朗読」(以下、「音読」と称します)について、お尋ねします。あなたが、みんなの前で音読する時(クラスの中での音読など)を想定して答えてください。以

下①から⑳までの質問項目に対して、あなたの気持ちに一番近い番号(5段階評定:5=とても・大変, 4=まあまあ, 3=少し, 2=あまり, 1=全然)を1つ選んで、番号に○を付けて下さい。あまり深く考えずに、答えてください。

全21(①~㉑)の質問項目を用意した。①は音読・朗読の「好き嫌い」を、②以降は、音読・朗読の指導内容に関わる事柄で構成した。②声、③発音・発声、④発音矯正、⑤韻律、⑥内容理解、⑦張り、⑧速さ、⑨高さ、⑩間、⑪聞き手意識、⑫プロミネンス、⑬意味句、⑭アクセント、⑮イントネーション、⑯明暗、⑰自然な読み、⑱感情移入、⑲正確さ、⑳下読み、㉑話し言葉との繋がり、である。

「聞き手として」の質問は、以下のとおりである。

—あなたが、他人の音読・朗読を聞くときを想定してみてください。

以下の①から⑩の質問項目に対して、あなたの場合に一番近い番号(5段階評定:5=とても・大変, 4=まあまあ, 3=少し, 2=あまり, 1=全然)を1つ選んで、番号

表2 音読・朗読するときの意識

項目(質問は要約したものもある)	5	4	3	2	1	平均	参考
①小学生の頃、音読が好きだった	10	14	8	23	6	2.98	5.0
④音読は、正しい発音や読み声を育てる	30	17	13	1	0	4.25	4.4
③音読すると、自分の発音・発声を意識する	25	21	10	3	0	4.15	4.89
②音読すると、自分の声を意識する	19	21	16	5	0	3.89	4.6
⑧音読では、努めてゆっくり読もうとしている	13	23	18	6	1	3.67	4.5
⑯音読では、一字一句を正確に読む	14	16	25	3	2	3.62	3.9
⑬言葉のまとまりに気をつけて読もうとしている	13	20	21	5	2	3.61	4.4
⑰音読では、感情を込め過ぎずに自然に読む	16	17	17	9	2	3.59	3.7
⑩音読では、「間(ま)」を取ろうとしている	10	23	21	4	3	3.54	3.9
⑦音読では、ハリのある声で読もうとしている	12	19	18	11	1	3.49	4.2
⑭音読の時、言葉のアクセントに気をつけている	12	16	24	6	3	3.46	4.0
⑮音読の時、イントネーションに気をつけている	12	22	13	10	4	3.46	4.2
⑪音読する時は、聞き手を意識している	11	18	19	12	1	3.43	4.1
㉑続けると話し言葉が上手になる気がする	14	15	17	10	4	3.42	3.9
⑯音読の時、明るく(暗く)読もうとしている	12	13	19	16	1	3.31	4.1
⑨音読では、声の高さに気をつけている	12	14	15	16	4	3.23	4.0
⑥音読の時は、文章の内容を理解してから読む	11	14	18	11	7	3.18	3.7
⑤音読で、文章の響きや調子を楽しんでいる	12	9	19	17	4	3.13	4.1
⑫強調する言葉をハッキリ読もうとしている	9	8	28	14	2	3.13	4.0
⑱音読では、理解や感動などを加えて読む	5	11	21	20	4	2.89	3.7
⑳音読する前に、必ず読む練習をする	10	5	15	17	14	2.67	3.7

※参考は、「小学生の頃、音読が好きだった」に「5」をマークした10人の平均。参考の項目③は、1名無答があり少数第3位四捨五入の値。

に○を付けて下さい。

あまり深く考えずに、答えて下さい。

ここでは、全 11 (①～⑪) の質問項目を用意した。①内容, ②身振り・姿勢, ③口形, ④声, ⑤速さ, ⑥高さ, ⑦明暗, ⑧間, ⑨意味句, ⑩プロミネンス, ⑪正確さ, である。

2) 結果と考察

表 2・表 3 に、5 段階評定の内訳人数・平均値を載せた。また、「参考」として、項目①「小学生の頃、音読が好きだった」で「5」をマークした 10 人の平均値も示した。なお、表 2 の質問②以降及び表 3 は、全回答の平均値の高い順に並べてある。

表 2 及び表 3 から、以下 6 点述べる。

(ア) 表 2 の上位 3 項目は、「④正しい発音や読み声を育てる (4.25)」と「③発音・発声を意識する (4.15)」 「②自分の声を意識する (3.89)」である。音読が正しい発音や読み声を育てる、と意識されていることが分かった。このことは、音読に対する肯定的な評価といえる。「発音・発音」「声」は自分に聞こえてくるので、意識されて当然であろう。

(イ) 音読技術としての「⑩明暗 (3.31)」 「⑨高低 (3.23)」 「⑫プロミネンス (3.13)」, 音読の目標である「⑥合文脈 (3.18)」, 音読そのものを楽しむ「⑤韻律を楽しむ (3.13)」, これらの項目は、意識されないわけではないが、概して低い得点となっている。もっと意識して欲しい指導事項であると考ええる。なお比較の対象として載せた「参考 (音読がとても好き)」では、「⑩明暗 (4.1)」 「⑨高低 (4.0)」 「⑫プロミネンス

(4.0)」, 「⑥合文脈 (3.7)」であり、いずれも高い。「⑧速さ (4.5)」 「⑬意味句 (4.4)」 「⑦声の張り (4.2)」 「⑤韻律 (4.1)」等も高い。「音読好き」は、音読技術への意識も高いことが認められたといってよい。

(ウ) 表 2 の全体の平均と参考 (音読好き) の平均とを比較すると、全 21 項目で参考 (音読好き) が高くなっている。さらにその内の 13 項目で、0.7 ポイント以上の差で参考が高い。やはり、「音読が好き」とする回答者は、音読・朗読に対する意識が高いといってよい。音読好きの児童・生徒の育成を目指すことが非常に重要であるといつてよいだろう。一方、表 3 「聞き手として」の結果では、全体の平均と参考 (音読好き) との差が認められなかった。この点、興味深く感じる。音読が好きでも、そうでなくても、聞き手としては差がないということである。

(エ) 「聞き手として」の上位項目は、「①内容 (4.28)」 「⑪正確さ (3.59)」 「④声 (3.52)」であった。まず、内容を聞き取ろうとしていることが分かる。これは、当然と言えば当然のことであろう。朗読技術に関わる「⑤速さ (3.34)」 「⑧間 (3.34)」 「⑥高低 (3.02)」 「⑦明暗 (3.0)」に関しては概して低い。音読技能を鍛えるためには、分析的に聞く耳を持った方がよいと考えるが、実際には、分析的に聞いていないようだ。上手な音読をする児童・生徒がいたときに、何がよいのか分析できないと、自分に取り入れることができない。音読指導に際して、「読み手」ばかりでなく、「聞き手」への指導も必要かもしれない。

表 3 聞き手としての意識

項目 (質問は要約したものもある)	5	4	3	2	1	平均	参考
①内容を聞き取ろうとして聴いている	29	21	10	1	0	4.28	4.3
⑪読み手の読みの正確さに注意して聴いている	14	23	12	9	3	3.59	3.9
④読み手の声そのものに注意して聴いている	16	16	18	6	5	3.52	3.4
⑩読み手の強調する言葉に注意して聴いている	12	16	22	9	2	3.44	3.1
②読み手の身振り・姿勢に注意して聴いている	11	19	13	16	2	3.34	3.5
⑤読み手の読む速さに注意して聴いている	11	13	24	12	1	3.34	3.2
⑧読み手の間の取り方に注意して聴いている	9	19	20	10	3	3.34	3.2
⑨読み手の言葉のまとまりに注意して聴いている	10	16	21	10	4	3.30	3.4
⑥読み手の声の高さに注意して聴いている	6	14	22	13	6	3.02	2.7
⑦読み手の声の明暗に注意して聴いている	9	8	23	16	5	3.00	2.9
③読み手の口形に注意して聴いている	6	3	10	30	12	2.36	2.7

※項目は、平均値の高い順に並び替えた。参考は、「小学生の頃、音読が好きだった」に「5」をマークした 10 人の平均。

(オ) 表2で最も低かったのが「㊟音読する前に、必ず読む練習をする(2.67)」である。下読みへの意識が低い。ここに最大の問題があると考える。「㊤合文脈(3.18)」が低いのも当然とあってよい。下読みをしなければ、意味句も決定できず、高低・明暗・緩急も付けることが難しい。読み方を向上させるという意識がなく、音読は場当たりのものとなる。分かりやすく伝える、ということは無理である。下読みが必須であることを理解させ、習慣化させる必要がある。

(カ) 表3で、最も低い項目は「㊢口形(2.36)」であった。他人の口形に注意して聴いているということはほとんどない。これは予想通りで、学生が正直に回答してくれていると感じた。

Ⅲ 全体のまとめ

1. 音読指導事項の提案

音読指導事項の提案に当たって、まず、学習指導要領解説国語編から音読用語を抜き出すこととする。その上で、朗読塾での学びから音読用語を加えて整理してみたい。

小学校学習指導要領(平成20年告示)解説国語編では、「(1) A 話すこと・聞くこと」の中の「話すことに関する指導事項」に、音読・朗読に関わる用語が出てくる⁶⁾。「姿勢」「口形」「大きさ」「速さ」「はっきりした発音(明瞭・発音)」「抑揚」「強弱」「間」(p13)である。

平成29年版では、音読・朗読は、「知識及び技能(1)」の中に示される¹⁾。「語のまとまり」「響き」「リズム」「理解したことを表出」「明瞭」「発音」「声」(p49)、「構成や内容を意識」「文章全体を意識」「内容の理解」(p84)、「大きさ」「抑揚」「速さ」「間」「表現性」(p123)である。

中学校学習指導要領(平成29年度告示)解説国語編では、「知識及び技能(1)、話し言葉と書き言葉」の「ア音声の働きや仕組みについて、理解を深めること」に音読用語が認められる⁷⁾。「音声の働き」「音節の基本的な構造」「アクセント」「イントネーション」「プロミネンス」(p41)が示されている。

以上の用語に、朗読塾での学びから音読用語を加える。朗読や話すことに向かわせる音読指導事項(音読用語)を厳選して、以下の14とした。姿勢・口形・発声・発音・明瞭・大小(強

弱・声量)・高低・緩急・明暗・抑揚・間・呼吸・下読み・意味句である。

上記を、低・高学年に分けて整理してみると以下のようなになる(注5)。

低学年	①姿勢・口形・発声・発音 ②明瞭・大小(強弱, 声量)
高学年	③下読み・意味句(語のまとまり)・高低・緩急・明暗・間・呼吸・抑揚

低学年①は、内容理解と無関係である。音読への貢献というよりは、よりよい発声・発音及び声の保障のための用語である。低学年②は、音読及び話す場面で明確に意識される用語である。①・②は、日本語の適正な音声言語を教室内に届けるために必要な音読用語である。高学年③は、合文脈音読を目指すのに必要な用語である。下読み・意味句は、内容理解の必要性を明らかにしている。高低・緩急・明暗・間・呼吸・抑揚は、下読み段階での確認・決定内容であり、同時に分析的に聴き取る観点でもある。③は、聞いて分かりやすい音読へと導く言葉である。これらの用語を体験的に獲得させることが、音読から朗読、さらには話すことの上達を保障することになると考える。

なお、現行の中学校学習指導要領では、「生徒が話す際に音声がどのような働きをしているかを捉え直すことが求められる。」(p41)とある⁷⁾。話すことの中で音読用語を捉えるよう示されているのである。つまり、現行の学習指導要領では、小学校までに学んだ音読・朗読技術を、中学校では、話すことの中で生かすように位置づけられているといえる。学習指導要領も、音読・朗読から話すことに繋げようとしていることが分かる。また、小学校の内に、音読技術を学習させておくというのは、筆者の授業実践結果から考えても妥当であると思われる。

2. 今後の音読・朗読指導への示唆

最後に、Ⅱ章の中学3年生への授業実践結果及び大学生への意識調査結果に基づいて、今後の音読指導について述べていこう。以下の6点を音読指導上の示唆としたい。

①小学校の頃、音読好きだったという学生が、全調査項目で得点が高かったことから、当然のことではあるが、音読好きの児童・生徒を育て

ることが重要である。音読そのものを面白いと感じさせる授業を構想したい。普段の音読指導の工夫、取り立て指導の工夫等を通して、音読に興味・関心をもたせる必要がある。

②下読みの習慣化を図りたい。聞き手に分かりやすく聞いてもらうためには、読み手が内容を熟知している必要がある。特に教師が範読する際には、安定した読み方を示すためにも下読みと意味句の決定は必須である。児童・生徒には、宿題で下読みの意識化・習慣化を図ることも可能であろう。その際、家庭との連携も視野に入れないといけない。

③音読の指導事項を明確化し、児童・生徒に意識させたい。前節で述べた音読指導事項である「意味句」「高低」「緩急」「間」等の音読用語を明示して指導する。音読用語を知らなければ、読み方を工夫しようがない、聞き取りの観点を知らなければ、分析的に聞きようがないのである。読み手として、聞き手として育てるためにも、また、教師の評価言・指導言の具体化のためにも音読用語の明確化と意識化が必要である。

④A 中学校の授業実践では、「追い読み」で音読技術を伝えることができた。音読指導の方法として「追い読み」が使えるようである。音読用語を明示し、見本を示して、追い読みで指導する。個人の読む技能を伸ばすため「個人の読み」を組み合わせる必要もあろう。

⑤授業実践の結果、中学3年では、人前での発表を避けたがる傾向があった。そこで、小学生の内に、音読用語を与え馴染ませ、習慣化させて、中学3年での心的抵抗を低減したい。

⑥合文脈音読を行うためには、文意・文脈の理解が必要となる。たとえば、授業開始直後の音読は、学習範囲の確認と併せた音読指導となろうが、そういう片手間な音読指導では不十分である。文章の内容を検討しながら、または内容理解後が、合文脈音読の指導を行うタイミングとしては自然である。段落や場面の「精査・解釈」の中で、またはその後で、合文脈音読指導として音読指導を位置づけるべきである。もちろん、音読指導で内容理解を促すということもあろう。国語授業での音読指導場面の位置づけを再考したいということである。

学校教育では、音読は日常的に行われている。しかも、小1から中3までの長い期間行われている。音読の機会は国語に限らずたくさんある。

実技の向上には時間がかかるが、声をコントロールする機会は十分にある。国語での合文脈音読指導の成果が、学習活動としての音読に広げられるとよい。

合文脈音読は、内容を分かりやすく伝えるとともに声を自在に操る技能を鍛えるはずである。合文脈音読の実践の積み重ねによって、音読から朗読へ、朗読から話すことへ、それぞれ一歩先を目指していくことができるのではないかと考えている。

【注】

注1) 「ぐんま朗読塾」で行われる指導の実際について、以下で詳述している。神部秀一(2016), 小・中学校における朗読指導の在り方 ―「ぐんま朗読塾」での学びから―, 未来の保育と教育, 東京未来大学保育・教職センター紀要3, pp.79-88。

注2) 意味句は伝達内容を明確にする、意味句の作り方によって受ける印象が異なってくるなど、意味句の解説をしている。神部秀一(2018), 音読の力, 『言語活動中心 国語概説』, 学文社, pp.89-91。

注3) 「合文脈音読」は、野口芳宏氏の造語。「文脈や文意に即応した読み方」を指す。野口氏は、『教室音読』は、『公的音読』であるとともに、『合文脈音読』であるべき」としている。なお、野口氏は、音読から話すことへという方向性については指摘していない。「明瞭な発音と張りのある声で、文脈や文意に忠実な、オーソドックスな読み方ができればいいのです」(p5)としている。野口芳宏(2012), 野口流 教室で教える音読の作法, 学陽書房, p54。

注4) 文部科学省「CLARINETへようこそ」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/003/002/007.htm (2022年10月30日確認)で、音読は、このように定義されている。

注5) この①②③の分類については、以下でも触れている。神部秀一(2018), 音読による読解指導 ―五年生「大造じいさんとガン」(光村)―, 柳谷直明・編著, 第10回・第11回鍛国研全国大会紀要(私家版「鍛える国語教室」41), p82。

【謝辞】

朗読の面白さと奥の深さをご教示くださった、ぐんま朗読塾主宰の遠藤敦司先生，授業実践の機会及び論文掲載の許可を与えてくださった鯨井文代先生，真剣に授業を受けてくださった太田市立 A 中学校の生徒の皆様，調査に協力してくださった B 大学の学生の皆様に，心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

【文献】

- 1) 文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説国語編 東洋館 p123, p49, p84,
- 2) 龍野直人（2013）音読の指導観に関する一考察 ―戦後国語科教育における音読・朗読・群読の位置づけから― 信大国語教育 22 pp11-21
- 3) 片山守道（2010）「話しことば教育」における朗読の役割 東京学芸大学国語科教育学分野 子どもたちの話しことばをどう育てるか～朗読でひらく～ p25
- 4) 高橋俊三（2008）声を届ける 音読・朗読・群読の授業 三省堂 p26
- 5) 荒木 茂（1989）音読指導の方法と技術 一光社 pp.49-50
- 6) 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説国語編 東洋館 p 13
- 7) 文部科学省（2018）中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説国語編 東洋館 p41